

## 歴史に学ぶ人口減少社会と豊かな経済の実現

光 定 洋 介 CMA

(証券アナリストジャーナル編集委員会委員)

### 1. 人口減少社会の到来

5年ごとに行われている国勢調査によると、2015年10月の日本の人口（総人口）は、約1億2,709万人で、前回調査の2010年と比較し約96万人の減少、割合としては0.8%の低下となり、1920年の調査開始以来、初めて総人口が減少した。出生率の低さを考えると、いよいよ人口減少社会に突入したと考えてよいであろう。2018年10月の人口推計統計でも、8年連続の人口減少となっている。人口減少の経済への影響については悲観的な側面に目が行きがちではあるが、今回はあえて楽観的な側面から考察してみたい。

### 2. 歴史にみる人口減少社会と生産性の向上の重要性

ここで、歴史を振り返り、人口が減少した国とその時の経済状況を確認してみよう。先に本章の結論を簡単に示しておくとして、歴史が示唆することは、人口減少は、需要の低下と供給の減少をもたらすものの、生産性の改善によって人口減少のマイナスを取り返す可能性も秘めているということである。

まず、14世紀の欧州でのペスト大流行による人口減少を振り返る。ペスト発生前の欧州は、交易の活性化や農業生産の拡大を背景に人口は拡大

傾向にあり、14世紀になると肥沃な土地はほとんど利用され、過剰労働、土地不足の状況にあった。こうした中で、1348年にペストが大流行し、人口減少が続いた。人口減少の結果、相対的に土地余り状態に変化した。土地が過剰になったことで、労働価値に対する地代の相対的な下落が生じ、実質賃金は上昇している。更に、封建制度が比較的弱かった現在のイタリアでは、農民はより生産性の高い土地へと移動して、一人当たりの農業生産高が上昇し、生活水準の向上をもたらしたという。人口減少期にあったイタリアで14世紀からルネサンス文明が開化した一因は、生産性改善による生活水準の向上があった可能性も指摘できる。これに対して、同時期のドイツでは、封建領主の権力が強かったために農民の自由な移動はなく、生産性の高い土地の集中的な利用も行われなかったことで経済が停滞したという。いかに経営資源を生産性の高いところに投入するかが重要であるかを示すエピソードである。

日本でも、享保・宝暦・天明の飢饉が発生した1730年～1800年の間に、東日本を中心に人口が減少した。人口が減少したのは東北・関東・近畿であり、東海は横ばい、その他の地域は増加した。18世紀は、3大飢饉に代表されるような災害にしばしば襲われたのだが、災害による人口減少の